

その15 六道珍皇寺に学ぶ

木林学

中川 典子



伝教大師作と伝わる本尊の薬師如来坐像(重文)。9月30日まで特別公開されている

子供の頃は、お盆のお精霊さんの迎えが大変怖く、閻魔大王、地獄絵図など世にも恐ろしい世界に半泣きになりつつ、毎年、門前の陶器市に釣られて行った思い出があります。

平安前期、延暦年間(七八二一八〇五年)に開創された六道珍皇寺は古くは愛宕寺と呼ばれ、周辺が風葬、鳥葬の鳥辺野の高台だったせいで澄み切った空を背に建っています。江戸時代建立の本堂は、簡素でありながら節のある輪

簡素な中に木の美を生かし



本堂仏間の欄間は、伽藍院山を表し、千体地蔵が参拝者を導いている



閻魔庁の役人でもあったと伝わる小野篁の立像。袖の広がり、は井戸から冥界に降るとき、風を受けて膨らんだ様子を表すという。小野篁作と伝えられる閻魔大王坐像。彩色は剥けているが、大きく見開いた鋭い目元、手足の肉感などが今もリアルに迫る(京都市東山区・六道珍皇寺)

の床板、柱を彫り出したような赤杉の柱、鮎色に艶のある松の敷居、毎年八月十七日の四日間、約七万人が参拝するため、千年以上も変わらない人々の祈りを受けるべく、装飾にこだわらず、参拝客が集えることに重きがあるように建築されています。

一八六〇年もありました。平安時代ではまことに大男であり、夜は閻魔大王の役人という奇怪な伝説もありました。大人になって、久しぶりに六道珍皇寺を訪ね、改めて閻魔大王坐像、小野篁立像、地獄絵図など間近で拝見し、死の世界を知る尊さを感じました。それは、宗派を超えて先祖供養をする、京の民俗信仰でもあり、生きるということを見つめることなのかも知れません。十萬億土から精霊(御魂)を迎える澄んだ青色の迎え籠、その姿は四方を土壁で囲われた鐘楼の中にあり、外より見えません。この寺は、そんな祖霊信仰の歴史を千年以上守り続け、目に見える信仰の証なのだと思えます。

(銘木発見記)



次回は9月8日(掲載予定)



鬼門よけの「真猿」。ゆったりとしたしぐさが愛らしい



真猿 ゆったりと鬼門を守る

方角に門や蔵、水屋・便所、風呂などの水を扱う場所を置くことを忌む風習が強く残っています。

六道珍皇寺の鬼門除けには、「真猿(魔去る)」が御幣を担ぎ、烏帽子姿でその方向と冥土に通ずる井戸をしっかりと見張っています。そのゆったりとした仕草の真猿が守っている本堂内仏間の欄間には千体地蔵の彫像が祀られ、地蔵浄土の伽藍院山の有様が表現されています。あの世との境、つまり「六道の辻」に建つ寺として深い意味を持つように思えます。

また、本年は、優しい顔立ちの非公認、重要文化財、薬師如来坐像(平安時代)が特別公開されます。

「命」の尊さが問われる時代です。古刹を訪ね、幾千の祈りを感じながら、生かされている自分を実感していただけだと願っています。

メモ

六道珍皇寺は京都市東山区松原通東大路西入ル〇七五(561)4129。「京の夏の旅」キャンペーンで、九月三十日まで文化財特別拝観を実施中(八月十九日までは一時休止)。本尊の薬師如来坐像(重文)をはじめ、寺宝の地獄絵「熊野観心十界図」などが間近に拝観できる。午前十一時~午後四時まで、拝観料六百円。